

まちとまちなみの公共性一眺めながら考える

早稲田大学 教授 佐々木葉

■ まちなみってなんだろう

建築と社会。社会と関わらない建築はなく、建築がない社会も存在しない。どこからどのように考えればよいか。難しいが、景観や風景を考えている身として、建築と社会がそのまま形に現れているともいえる、まちなみを入り口とすることとした。しかし、まちなみとはなにか、これもまた難しい。時代とともにその言葉の指すものも異なり、そこに何を求めるかも変化していると感じる。あなたの思うまちなみとは、どのようなことだろうか。そこにひととき思いを巡らせてから、以下の私の考えるまちなみの話を読んでみていただければ幸いである。

■ 郡上八幡の3時点まちなみ絵巻

まず、郡上八幡の話から始めたい。知多半島にある日本福祉大学に勤めていたころ、学生たちとフィールドサーベイをしてみようと、知人の紹介で岐阜県の郡上八幡を訪れた。1996年6月のことだと思う。ここで出会った八幡町の役場職員の方に後日お声がけいただき、橋のデザインやら街なみ環境整備事業やらと、あれこれに関わることとなった。学生たちも卒論や修論をこのまちで書くこともでき、縁は早稲田に行ってから途切れることなく、これもまた縁を得て2022年4月から町屋を一軒お借りして研究室のサテライトとして使っている。名前はsaoco lab.という。そのお披露目の際に作ったのが3時点まちなみ絵巻である。これは私の手元にあった1999年、2010年、2020年に撮影したまちなかの建物のファサードの写真約600軒分を通りごと、時点ごとに横に繋いで連続立面写真としたものである。とてもアナログな仕事だ。なぜこんな写真データがあったかというところ、まず1999年に市民ワークショップでまちなみルールを作っていくための基礎データとして撮影した。まだフィルムカメラであった。その後早稲田に移ったのだが、このデータがあるなら事後調査をしたら良いのでは、と学生に言われ、2010年と2020年に同じ場所を撮影していたのである。この死蔵されていた写真データを絵巻と一軒ごとのアルバムにしてsaoco lab.のオープンに合わせて披露した。

前置きが長くなったが、まちなみとは何か、これを改めて考えたのは、このsaoco lab.という町屋の拠点に身を置く経験と、3時点まちなみ絵巻を眺めたまちの人たちの語りが契機となっている。

■ まちなみ絵巻の眺め方

まちなみ、といえば、まず横並びに立つ建物がある程度揃っていることをよしとするのが暗黙の了解であろう。日本の街並み論の古

典、芦原義信の「街並みの美学」は、西洋と日本では建築や空間認識が違うことを踏まえつつも、街並みとしては西洋都市に学ぶべきというスタンスに立つ。つまり高さ、壁面線、意匠、色、二次輪郭線を構成する附属物類などの調和やバランスが、まちなみの論点となる。ついで時間軸でどう変化するかについては、ガラッと変わってしまうよりは保存されたり、何らかの記憶が継承されたりしていることが基本的にはよしとされるだろう。絵巻で言えば前者が横方向のつながり具合となり、後者が同じ建物を縦に3時点で比較する見方となる。八幡のまちなかでは町屋というビルディングタイプを基本とした建物が連たんし、この四半世紀でガラッと変わってしまうような開発は起きていない。なお郡上八幡には通称北町と呼ばれる吉田川右岸に2012年に重伝建地区に指定されたエリアがあるが、まちなみ絵巻はこうした保存の網がかかかっていないところを対象としている。というのも1999年にまちなみ保存の活動があったエリアは写真撮影から除外しており、過去のデータがないのである。商店の並ぶ賑やかな通りやほぼ全て住宅で空き家も増えているような、普通の生活の場の通りが対象となっている。

さてさてまたしても前置きが長くなったが、3時点まちなみ絵巻をsaoco lab.に貼っておくとまちの皆さんが興味深く眺め、あれこれと語りだす。ここは何だったという場所として建物を同定し、そこで私は何をした、ここはどんなふうだった、という呼び覚まされた記憶が口をついて出てくる。いまは閉店しているかつてのスーパーが初めて一人でお使いにいったところだった。釣竿つくりの名人がいたこの家では気難しい幸太郎さんにいつも怒られた。横方向に家々を目でたどっていくと、こうした記憶がふっと顔をだす。「あ、そうそう、そうだった。」と。絵巻によって期せずして得られたこうした感覚は、なぜだか温かい。そしてまた、今のみを知る人が、「へえ、ここ、昔こんなだったんだ。」と縦に絵巻を遡る。おしゃれになった店がかつては地元向けの地味な店であったり、いまは空き家のように静まり返る建物がかつては賑やかなパン屋だったり。その履歴を体験として持つ人と持たない人が、絵巻を前にして記憶と想像という眼差しを一つの建物に注ぎ、そこに流れていた時間の存在を一緒に受け止める。

あるいは思いもよらなかった話として、1999年のこの家の建具を2010年のこっちの家に使ったんだとか、ここで店をやっていた人がこっちのここに移ったんだとかを聞く。こことここは親戚だ、とか。まさに「へえ。そうなんですねー」と、別々に見えている建物群のなかに生活の軌跡が書き込まれ、一つの生態のようにつながっているのだなあと思えてくる。さらには、ファサード写真からは読



郡上八幡の地勢



郡上八幡の日常のまちなみ



3時点まちなみ絵巻（部分）

み取れないその建物の奥にもかって、ここは行商の人たちが泊まっていたとか、土間が通りぬけられたといった情報が伝えられると、仮想的にその家に入り込み、表からは見えない様子や人々のざわめきを重ね描く。絵巻はヨコ、タテ、ナナメ、オクに読み解かれるのだ。そんな風にダイナミックに眺め、ひとしきり絵巻の上に視線を走らせたのちに、このまちに嫁いできて、その時はどんな風で、あんなこんなことがあって、私の人生ってこうだったのか、と視線を宙に泳がせながら呟く人もいる。

こうした様子を経験していくうちに、まちなみとは、眺めとしての整序、美しさ以上に、なんらか深い意味をもつ存在なのではないかと思えてきた。

■軒下ブック

町屋形式の建物には、軒下という中間領域がある。開口の形や大きさ、内部の見通しや用途は様々だが、地面から鉛直に立ち上がる壁一枚で内外が区切られることはない。道との境界あたりには、植木鉢、腰掛け、商品、プロパンガスボンベ、エアコン室外機、掃除道具などが置かれ、軒下からは提灯、バケツなどがぶら下がる。さらに水路があるところではその水を使うためのせぎ板（水路に差し込んで一時的にダムアップするための板）や柄杓なども置かれている。こうした軒下空間に「何が」見られるか、またそれらを「どう設えるか」が実に様々である。それを興味深く思った学生が研究対象とするとともに、『郡上八幡の軒下を観る』という冊子にまとめてくれた。「町屋には軒がある。その軒の下には、何かを置いたり、吊るしたり、引っ掛けたりしている。その一つ一つをよく観ると、その人らしさが見て取れる。見過ごしてしまいそうなそのふるまいは、郡上八幡が郡上八幡であるために必要なのである」。冊子表紙に配されたメッセージである。145ページ290枚の写真は、軒下を観る6つの視点と設えるための4つの技術と工夫によって編集し、saoco lab.の軒下生活の様子も加えた。滞在中私は軒下に椅子を出して朝ごはんを食べ、本を読む。夏の夜は道にはみ出してみんなで晩御飯を食べたり、月見をする。深夜一人静かにビールを飲んだりする。家の前を流れる水路と小さな川の水音が常に心地よい。こうした表に現れ出る振る舞いは、まちの人にちょっと奇妙に見えるかもしれないが、きっと何人かは楽しそうだねと思っていると思う。

郡上八幡の軒下については、いろいろと調査もした。そのなかで

まちに住む人々へのアンケートから、軒下空間への態度にはおおまかに三通りある様子が見えてきた。まずは自身の家でも駐車場やものを置くという単なる機能としては使っているがそれ以上に何かすることはなく、他の人の軒下にも無関心という人たち。次いでそれとは真逆で植木鉢をはじめとする様々な設えをおき、その置き方にも工夫を凝らし、気を使う積極的な人たち。水路掃除や打ち水の頻度も高く、自身の行為がまちなみの価値を高めることを意識しており、観光客を含む他者との対話も楽しんでいる。そしてこれら両者の中間的な人たちもいて、植木鉢や設えを置き、手入れもする。プロパンガスボンベなどには目隠しをして、他者との立ち話をし、近くの人々の軒下も気にしている。しかしそこには自己表現、自身の楽しみの発露というよりも、まちに住むものとしてちゃんとしておかないと、という意識が通底している感がある。この中間的な人の意識はあまり考えたことがなかったので、調査結果を得てから軒下の見え方が少し変わった。

こうして軒下の観察、見方の解像度をあげていくと、直接そこに住まう、営む人と会ってはいないけれども、その人となりや暮らし方を感じ取ることができ、まちのリアリティが高まる。訪れる度に、あそこどうしてるかな、という思いで通りすがりに点検的眼差しを注ぎ、安堵したり、ちょっと不安になったりする。それは私以外の他者が今日もこのまちで暮らしているという感覚を支えてくれる。



郡上八幡の軒下の様子



まちなみ絵巻の展示の様子



「郡上八幡の軒下を観る」（通称軒下ブック）



saoco lab.の軒下でのふるまい

なお、軒下に多様なふるまいが現れることを可能にしているのは、間口が狭く奥行きが長い敷地に高密度に住まうための知恵が生まれた町屋というビルディングタイプであり、軒裏をあらわしにしておけるという防火規定からの自由であり、細々とした造作を担う工務店や建具店の存在である。さらには自主的な消防活動の充実などを理由に建蔽率80パーセントとして大幅なセットバックを強いなかったための地元発意の都市計画決定である。そうした社会制度に支えられたまちなみが、絵巻からの豊かな語りのような意味解読と、軒下の振る舞いの自由を直覚させる風景となっている。その一方で、近年急速に増えているゲストハウスが物理的には形態を保ちながら、軒下には提灯を吊るしながらも、顔の見えない、いってみればオクがみえない立面となり、まちに小さなブラックホールのような異質性をもたらし、なんとなくの不安がまちにひろがっている。

■まちなみとまち

関わり始めて四半世紀、拠点を構えて丸4年、郡上八幡というまちでのさまざまな経験から、まちとまちなみのことを改めて考えるようになった。いまさらであるが、私自身は土木分野にいますが、その中では極めてマイナーな景観や風景を軸足にしたまちづくりやインフラのデザインを考えている。実務では橋や水辺、オープンスペースのデザインや、景観法にもとづく景観計画の策定などに携わる。郡上八幡でもまちなみルールをつくる仕事にも関わり、その成果は「郡上八幡市街地まちなみづくり町民協定」として37町内で参照されるルールとなっている。基本理念は全町内共通で、(1)水の恵みを活かすまち、(2)お城や山並みとともにあるまち、(3)今あるものを活かすまち、(4)歩行者中心の人にやさしいまち、(5)人をもてなす気持ちを大切にすまち、(6)生き生きとした賑わいのあるまち、(7)まちのみんなで話し合い個性を大切にすまち、としている。それを受けて建物高さ、壁面位置、建物意匠、色彩、看板、設備機器類、敷地管理について定性、定量的に示している。2002年に合意されたこの協定を振り返ると、当時もまちなみを視覚的秩序のみで捉えてはいなかったな、と思う。つまり郡上八幡という幸いにも個性豊かなまちが、そのまちらしくあり続けるためのまちなみへの共通認識を明文化したのであった。

それから20年をへて、まちなみ絵巻や軒下カタログを通してまちのひとの問はずり言葉や意識に触れることで、まちという社会のなかで生きていく、あるいは生きてきた私を支える存在としてのまちなみ、という側面に思い至った。なぞらえるならば、ハンナ・アレントのいう公共性の二つの次元をまちなみは備えている、と。まちを構成する一軒一軒の建物との関わりをなかで代替不可能な私の生がある。つまり私の生は建物を「現われの空間」として存在する。その建物たちは、少しずつ変化しながらも連なってまちに存在し、タテ、ヨコ、ナナメ、オクに読み解かれ、だれにでも眺められるまちなみという「共通世界」として存在する。共通世界としてのまちなみがあることによって、私の現れの空間は孤立した記憶に埋没せず、まちの私たちの共通世界となる。現れは操作性が高い軒下という中間領域によってきめ細かく表現され、あまりにバラバラで

はないビルディングタイプが共通感覚を担保する。このように郡上八幡は公共性を育むに適したまちとまちなみの条件を有しているのだが、それは城下町起源の空間構造と、それを継承するための努力がなされてきたためである。道路や橋の建設によって空間構造が大きく壊れる危機もあったが、回避された。用途地域の種別がもつめる平均的な基準である建蔽率や防火性能要求をまちの特性に合わせることで、町屋というビルディングタイプの継承を可能とした。伝建地区の指定を受けていない都市計画区域においてもこのように整えられた社会条件を舞台として、個々の建築にきめ細かい造作をなす建設技術があり、使いこなすまちの人がいる。軒下ブックの表紙に記されたメッセージのように、軒下に現れる見過ごしてしまいそうなるまいがこのまちをこのまちたらしめており、建築と社会の相即不離な関係を風景にしている。

とはいえ、郡上八幡のまちなかの人口はこの40年で3割以上減少し、過疎地域指定を受けている。現在進行形のチャレンジは、空き家空き地もさることながら、建物や設えの形を継承しながらも使い手がまちに「現れず」、共通世界としてのまちに無関心という、人の側の変化への対応である。ゲストハウス関係者、あるいはゲスト的な移住者、まちを使わない子どもたちが、どのように、どのような共通世界としてのまちなみを継承していつてくれるのか。そのための言葉をさがしている。

■まちを俯瞰する

舞台をがらりと変えよう。新宿は大久保に建つ16階の私の研究室からの眺めに。1967年に竣工した早稲田大学51号館は18階建て、翌年霞ヶ関ビルができるまでは日本一、いや東洋一の高さを誇っていた、とは我々がこのビルを説明する際の常套句だ。その16階北側に部屋をあてがわれたことは私の人生をかなり幸せにしている。南側の部屋は日光を遮るためほぼ終日ブラインドを下ろしていないといけませんが、北側からは朝昼晩、存分に窓の外を眺められる。直近には戸山公園、その先に低層の街区、超高層はかなり遠いところまで立ち上がらない。日によってはさいたま新都心のギザギザなシルエットや、日光の男体山が見える。マジックアワーには実に美しい色に空と雲とビルが染まる。雨雲が彼方からやってくるの見える。流石に全開はできなくなったがわずかに引き戸のサッシをあげて風を入れることができ、しっかり幅のあるグリッド部材にはガラスが佇んだりする。ツルツルなビルとは大違いである。この名建築から好きなだけまちを俯瞰できることはなんと幸せなことだろう。

視点場としての建築のあり方もさることながら、さまざまな位置からまちを眺める機会があるのは都市にいる醍醐味であり、都市をまちとを感じる身近な体験となる。16階からは、人の活動は自ずと目にはいらない。雨が降っているかを確かめるために眼下の人が傘をさしているか否かを覗き込む程度である。よって直接的に人の姿を認めるというよりは、あのビルにもこの屋根の下にも人が暮らしているんだなあ、という人の営みの集合体としてのまちの存在を思い、夜景はその感が強調される。より高い超高層ビルからの俯瞰となればその集合体が大きくなり、営々と都市を築き営んでいる人間



16階の研究室からの眺め

の欲望の果てしなさと健気さに圧倒される。ただ、このような眺め方は東日本大震災以降に生じた。それ以前は、なんでこんなにバラバラなんだろう、なんであんなふうなビルの色形なんだろうと、雑多なあり様にうんざりばかりしていた。しかし津波によって根こそぎまちが破壊された状況を高台から俯瞰したのちには、ともかくまちがちゃんとあり、人々がそこで日常を生き続けられているならそれで十分ありがたい、と心から思えた。まちを俯瞰する眼差しが明らかに変わった。同時に人が人のつくったまちを破壊することは決して許されないと。地震や津波自体は止められないが、爆弾は落とさなければ、作らなければ、まちを破壊することはない。

■まちに現れる人の姿

16階から降り、地上に近づきながらも数階程度の高さからまちを眺めることも日常的な体験だ。高架を移動する車中から、あるいは様々な窓から。顔の識別はできないが動作や雰囲気が見てとれる距離での人の姿がふと目に入ってくる眺めが好きだ。屋外階段やテラスに佇む人、屋内照明に照らされてちらりと見える人影。視線は合わない、あるいは儀礼的無関心を装って視線を合わせないようにしつつも、そこに誰かがいる、現れている様は都市をもっとも都市らしくする。賑わいの景などではなく、ふとそこに立ち現れた誰かのふるまいの断片。それが見えたということは、先方からこちらも見ることではできるということになる。こうした無数の相互視線のベクトルがランダムに都市の中空をタテ、ヨコ、ナナメ、オクへと四六時中錯綜している。それは、その時々に一瞬立ち現れる共通世界としての都市風景のシークエンスなのだと思う。

2025年は建築雑誌の『新建築』の月評をなぜか担当することになり、毎号苦労したのだが、その中で2月号の集合住宅特集では、不動産経営の極みのごとく容積率を使い切りながら巧まれる空間個性の読み解きを楽しんだ。なかでもテラスやバルコニーは住み手がまちをみる視点場となり、同時にその人がまちに現れる場となることで見る見られる関係を生み出し、都市的な集住の感覚を支える。住み手は日々の暮らしのなかでふとまちを眺め、まちからは住み手の暮らしが垣間見える。そうした都市風景体験を可能とする機会として掲載作品を読み解いた。共用部となる廊下や階段が外に現れる空間構成をもつ集合住宅は減ってはいるが、そこに工夫を凝らした建築は魅力的だ。3次元に展開する中間領域の視線による接続は、都市ならではのまちなみといえよう。コーポラティブハウスのように集まって住む人々にフォーカスして共有の現れの空間をデザインする例も多々ある。ただ私としては、その敷地の前を一度かぎり通り過ぎる人に対して、「あ、こ



ふと目のとまるまちの眺め



見知らぬ人たちの現れる眺め

のまちのここに人が暮らしているんだな」という感覚を与えてくれるような仕事に惹かれる。人の姿、あるいは気配の滲み出しがやはり都市のまちなみの魅力の要に思える。

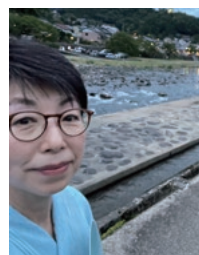
■まちにひらく

人の姿、人の景は、賑わいやパブリックライフにつながり、当該建築の利用を特定しない「まちにひらく」というキーフレーズにつながる。これは多くの建築、というか不動産開発においても重視されているが、誰に対してどのようになんのためにひらくのか。その議論はなかなか難しく、新建築の月評でもしばしば頭を悩ませた。敷地の一部や低層部を公共に開放することで容積の上乗せを可能とするという開発制度の歴史はすでに半世紀に及び、ただの通路や空地として寂しく放置される状態から、居場所となる低層空間へと実績は進化してきた。地上からは視野に入らない超高層ビルとは無縁に、グランド付近には豊かな半公共空間や賑わいが、あるいは貴重な都市の緑が創出されるタイプの開発に私たちはもはや慣れている。そこは、景観やまちづくりに興味のある学生たちがやりたい仕事の典型的イメージにもなっている。マクロに言えば都市におけるプライベートとパブリックの中間領域において、実態としてのデザインは洗練性と多様性を高め、そこにテーマ型コミュニティも生まれている。一方でそこには目に見えない強い管理性もあり、ホームレスが夜中のひとときを過ごすことは難しく、日中の人の振る舞いも空間がアフォードする範囲にうまくおさまっている気がする。それはそれで心地よく、そこで振る舞い、現れる自分も悪くないだろう。あとは、都市の中間領域を使いこなす多くの人々が、このまちという共通世界を得ていければ、都市のまちなみは公共性を獲得できるだろう。しかしそれは物理的な建築やオープンスペースのかたちだけでは決まらず、まちで生きる人の感覚によるところが大きい。その感覚とは、他者がいるまちへの信頼にやどり、他者と自身を相対化する間主観性に基づく。私が私をまちにひらけるかどうか、なのだ。こうした極めてベーシックなまちへの態度を育むような建築の原体験、まちの原体験はどこでどのように可能であるのか。視覚的な美しさや個性という観点からではなく、郡上八幡であれこれ考えてきた公共性としてのまちなみ、その構成要素となる建築、その建築のあり方を規定する社会制度は、いまどこにあるのか。それを探し、育てていくにはどうすればよいか。こうした文脈にまちなみという言葉を置いてみると、建築と社会を分けずに考えていくこともできる様な気がする。

参考文献

- 芦原義信「街並みの美学」岩波書店同時代ライブラリー, 1990
- 佐々木葉「まちにいる・まちにひらく 郡上八幡saco lab.の120日」土木学会, 景観・デザイン研究講演集No.18, pp.350-357, 2022.12
- 佐々木葉「風景体験の楽しみとレッスン」土木学会, 景観・デザイン研究講演集No.19, pp.283-288, 2023.12
- 佐々木葉・猪俣誠野・武藤隆晴・太田恭平・中山由子「郡上八幡におけるまちなみの公共性を育む軒下空間のデザイン」住総研, 研究論文集・実践研究報告集, No.52, pp.83-93, 2025
- saoco lab.の活動はInstagramアカウント「saocolab」にて発信
- ハンナ・アレント「人間の条件」ちくま学芸文庫, 1994
- 斎藤純一「公共性」岩波書店, 2000

ささき・よう



早稲田大学建築学科卒業、東京工業大学社会開発工学専攻修了。博士（工学）。東京大学助手、名古屋大学助手、日本福祉大学助教授などを経て2003年より現職。専門は景観論・まちづくり・土木デザイン。土木学会第112代会長。NPO法人郡上八幡水の学校副理事長。共著に「土木デザイナーひと・まち・自然をつなぐ仕事」、「風景とローカルガバナンス」など。デザインアドバイスに天龍橋大橋（土木学会デザイン賞、田中賞）、霞橋（土木学会田中賞）、石巻市街地における旧北上川の復興かまちづくり（土木学会デザイン賞）、石巻南浜津波復興祈念公園など。